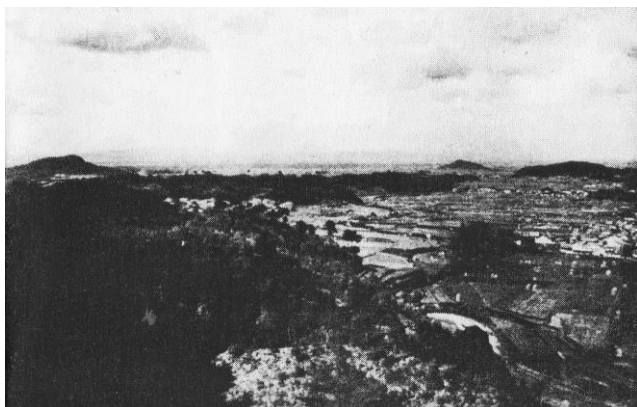


その 36

光風先生の『萬葉集新選』



飛鳥京を望む（『萬葉集新選』口絵から）

????????????????
「莫鷺圓隣之大相七兄爪謁氣 吾瀬子之 射立為兼 五可新何本」 額田王(卷1・9)

アララギ派の歌人で万葉学者中島光風氏——光風先生は、九州は福岡の出身で、東京帝国大学国文学科卒業、昭和9年に旧制広島高等学校国語科教授として広島へ赴任している。光風という名は一見すると、歌人の雅号のように思えるが本名である。光風先生は、生前2冊の本を出版している。1冊は、広島に赴任する直前の昭和9(1934)年2月、大倉廣文堂から、万葉学者藤森朋夫氏と共著で出版した『萬葉集新選』である。光風先生が編責だったようだが、共著者の藤森氏は、光風先生と同じアララギ派の歌人で、万葉研究会の仲間だった。当時は陸軍大学教授だったことも面白いが、戦後は日本大学教授、東京女子大学教授を歴任、昭和44年71歳で亡くなっている。

そこで、『萬葉集新選』だが、すでに中古本市場では入手できず、国会国立図書館デジタルコレクションをオンラインで読むことができた。一読して、それがきわめてシンプルな本であることを知った。そして、シンプルであるが故に読むのがきわめて難しいことも分かった。本を開くとまず、飛鳥京や吉野の口絵写真の後、いきなり「凡例」から始まっていて、一般書のように、「はじめに」や「序」がない。辞書や事典のようだ、と思いながら、内容に目を移してみると、万葉集の本文が原文のまま、万葉仮名で載っていて、歌にだけ、その左に、訓、つまり、平仮名の読み下し文が付されている。そして、題詞の一部にルビはあるが、左注には何もふられておらず、歌にはわずかに頭注が付されているのみで、口訳もない。

そこで、本書冒頭の「凡例」を見て、その理由が分かった。

<一、本書は高等程度の諸学校の教科書として編纂したものであります>

つまり、一般書として編集されたのではなく、高等学校の教科書として編纂されており、口訳、つまり歌の意味やその解説等は、授業の中で行われる、ということだろう。本書が刊行された昭和9年、光風先生は、旧制広島高等学校に赴任している。そして、阿川弘之氏や大浜巖比古氏が入学したのが昭和12年と

となっているので、彼らは、この『萬葉集新選』によって、初めて万葉集と接し、その魅力に取り込まれることになったのだろう。凡例は、さらに続く。

＜一、集中の最も代表的な巻である巻一、巻二の両巻は目録を除く本文全部を収め、巻三以下の巻は適宜抜粋して、長歌・短歌・旋頭歌・佛足石體歌を合せ總數約五百首としました。この編纂法は萬葉集の教科書としては初めての試みであります。私どもの経験から見て、初學者のためには最も効果的な方法の一つと思ひます＞

巻1と巻2は、最も代表的な巻でありすべての歌を、それ以降は適宜抜粋して、500首を「新選」、つまり、新たに選んだ、として、初めての試みとしている。確かに、万葉集全4516首が、いきなり目の前に出されたら引いてしまうが、初心者にとっては、1冊の本に収まる500首は妥当な歌数だろう。

＜一、本文は主として寛永版本に據り、諸本・諸註以下最近の研究に至るまでを参考して校訂しました。記載の形式は原文と平仮名の訓とを併行させる方法をとりました＞

阿川氏は、「大浜は、学生の頃から、万葉集を白文（原文のまま）で読んでいたが、私には手に負えなかった」と言っていたが、大浜氏にとっては、本書がその原点だったのかもしれない。

そして、＜一、巻頭に解題を附して學生諸君の参考に資しました＞として、目次をはさんで、7項目にわたり、「解題」を記しているが、その内の3項目を引用、紹介する。

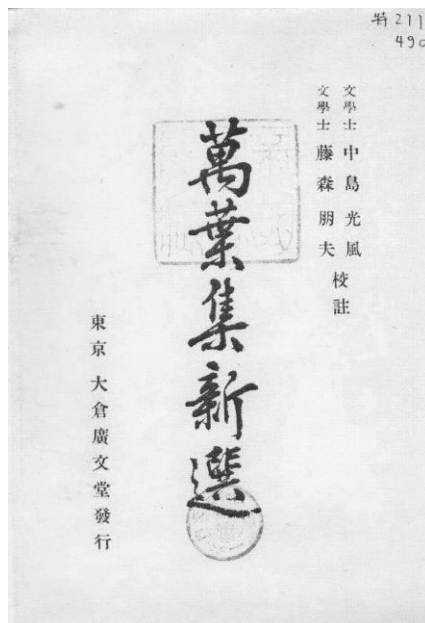
＜解題

萬葉集は我が國に現存する最古の歌集である。しかも單に時代が古いといふのみでなく、内容についても非常に傑出したものを持ってゐて、我が國に於ける最も代表的な文學書の1つである。

一 成立の由来

この萬葉集が何時頃、如何やうにして出来上ったかについては、今日までの所あまり明確にされてゐない。従來行はれて來た主要な説を擧げて見ると、

- (一) 平城天皇の御代に撰定されたといふ説。古今集の序文に基づいたものであって、顯昭の「萬葉集時代難事」に出でゐる説である。現代の學者中にも之に賛成する者がある。
- (二) 橘諸兄勅撰説。栄華物語（月宴巻）に見える説であつて、高野の女帝（孝謙天皇）の御代天平勝寶5年に友大臣橘卿以下の諸卿大夫等が集つて撰したとする。又之に近い説で、巻1・2の両巻は勅撰であらうとの説が今日一部の學者間に行はれてゐる。



(国会図書館デジタルコレクション)

(三) 大伴家持私撰説。藤原清輔の袋草紙に孝謙天皇の頃大伴家持が私に撰んだものであらうと述べてゐる。沖の代匠記が種々の理由を擧げてこの説を支持してゐる。

(四) 諸兄・家持兩人撰説。古くは仙覚、近くは荷田春満等が唱へた。

(五) 萬葉集に新古の二部ありとする説。賀茂真淵の主張した説で、卷一・二・十三・十一・十二・十四の巻が古い巻であるとし、萬葉全巻の順序を變更してゐる。

大體以上の如くであるが、何れの説にも弱點があつて直ちに從ひ難く、結局萬葉集成立の由來は不明であるとする他はない。家持の手が相當に加はつてゐるであらう事は種々點から推測出来るのであるが、それも全體を彼一人で撰したとは考へられない。集中で最も新しい歌は卷二十卷末にある天平寶字三年正月作の歌であるから、その頃からあまり降らない時期に大體整理され、後、平安朝に至るまでに幾度か補訂されて現在の如き形になつたものであらうとの説す者が多く、甚だ漠然とはしてゐるが最も無難な見方であらう。

旧制広島高校で、萬葉集と光風先生とに出會つた大浜巖比古氏は、その後萬葉學者として、大浜萬葉独自の「幻視の手法」を用いて、「如何やうにして出来上つたかについては、今日までの所あまり明確にされてゐない」萬葉集の由來の解明に挑戦した。そして、先に紹介したように「光仁天皇勅撰説」という、従來の説にはない大胆な説を提起したわけだが、天上の光風先生は、この新説をいかに判定しただらうか。

それに対して、前回私が提示した「萬葉ファンタジスタ～万世集から萬葉集へ」は、光風先生が紹介する従來の説の「(一) から (四) までの説」に、結果的には則つていた、ということになる（「(四) から (一) までの説」という方が、より正確かもしれない）。（一）の「平城天皇時代説」は、「万世集から萬葉集へ（その3）」で提示する予定だが、萬葉集の名前の由來についても、光風先生の説に準じていたことが、次の「解題」を読んで分つた。

＜ 萬葉集の名義

萬葉集の名義について古來有力な説が二説あつた。一は萬葉とは萬づの言の葉の義とするもので、仙覚・契沖等によって唱へられた。他は萬葉とは萬世の義とするもので、鹿持雅澄の説である。他に今一つ萬葉とは衆多の木の葉の義で、多くの歌を集めてゐるから萬葉集と名づけたとする説があつて、岡田正之博士等が之を主張した。併し山田孝雄博士が幾多の證據を擧げて第二説を支持されてから（萬葉名義考、國語と國文學大正十四年二月號）ほぼ議論は終結し、今日では萬世説が殆ど定説の如くなつてゐる。

さて、次の「解題」は「作者」を選ぶ。作者というと氣になる人物がいるが、ひとまず「解題」を読んでみよう。

＜ 作者

平安朝以後の勅撰集の作者層が朝廷を中心として、殆ど貴族・特權階級に限られてゐるのに對し、萬葉集は上は至尊をはじめ奉り、下は一般庶民・地方農民より乞食者に至るまで、貴賤男女あらゆる階級を網羅し、その地域は帝都を中心として殆ど全國に及んでゐる。もとよりその主要都分をなすものは當時の知識階級たる貴族・官吏やその周圍の人々であるが、柿本人麿や山部赤人やその他不朽の傑作を残してゐる

歌人達で、卑官の爲に正史に名さへ留めてゐない人々が多く、又作者不明の歌や東國農民の作たる東歌の中に名歌の多い事も人の知る所である。階級的にも地域的にも作者の範囲の廣い事は後世歌壇にもあまり類を見ない所であつて、和歌史上稀に見る盛觀を呈してゐる>

さて、気になる「作者」である。光風先生の研究を引き継いだ大浜氏は、前回紹介したように、「越えなければならぬ最大の難問」としているのが、一人の謎の作者、「中皇命」だった。「中皇命の謎」については、大浜氏は、次のごとく書いている。

<それはわたくしの30年に及ぶ『万葉』探求のなかで、謎のほほえみで問いかける『万葉』のモナ・リザであつた。「わたしは誰でしょう」。その歌に接するたびにその問いかけはつづいた>

光風先生は、『萬葉集新選』で「中皇命」をどのように紹介しているのだろう。巻1の3番歌から5首、「中皇命」名の歌があるが、その頭注はすべて、「傳未詳」となっているのみである。大浜氏は、この「傳未詳」の作者とその歌に惹かれて、長年にわたり『万葉』のモナ・リザを追いかけ、その「謎を解いた」のである。そう、大浜氏は、大胆にも、「中皇命」は「額田王」と同定したのだ。大浜氏の「遺弟」坂本信幸氏は、その説に異論があることを解説しているが、それはそれとして、もしも、大浜氏が言う通り、「中皇命」が額田王だと仮定すると、巻1の冒頭部分は、3番歌以降21番歌まで、その殆どを占めることになる額田王の歌群は実に壯觀である。大浜説に基づき、その歌番と作者名を列記してみる。(=は相聞歌)

3~4番歌：額田王（中皇命）、5~6番歌：軍王（未詳）、7~9番歌：額田王、10~12番歌：額田王（中皇命）、13~15番歌：中大兄皇子、16~18番歌：額田王 = 19番歌：井戸王、20番歌：額田王 = 21番歌：大海人皇子

また、額田王作の9番歌「^{????????}莫囂圓隣之大相七兒爪謁氣 吾瀬子之 射立為兼 五可新何本」は、初句と2句が解読不能となっているが、本書では、頭注で、「この歌には定訓がない」とした上で、「舊訓」として、「ゆふつきの あふきてとひし わがせこが いたたせるかね いつかあはなむ」と、訓、つまり、読み下し文を付しているのも興味深い。

ところで、本稿冒頭の写真をご覧いただきたい。『萬葉集新選』の最初の口絵写真である。この写真に付されたキャプションは、このように書かれている。

<高市郡高市村大字祝戸ふぐり山より北方飛鳥京を隔てて大和三山を望む>

万葉集のふるさと、昭和初期の飛鳥村の写真である。後方に見えるのが大和三山。右から、天の香具山、耳梨山、畝傍山である。キャプションにあるように、ふぐり山からの展望で、現在もここには展望台があるという。ふぐり山の「ふぐり」には、「・・・」の強調のルビがふられている。では、「ふぐり」とは……男性器の陰囊のこと。いかにも奇妙な名を持つ山である。命名の由来は、この山の麓近くに、「マラ石」と呼ばれる長さ1メートルほどの男根の形をした奇石があるから、とされているから、さらに奇妙だ。「マラ石」の案内板は、次のように説明している。

＜明日香村にある謎の石造物の1つ。男性器を模したもので本来は真っすぐに立っていたとも言われている。地元では、飛鳥川をはさんだ対岸の丘陵を「ふぐり山」と呼び「マラ石」と一対のものとする説もある＞

「本来は真っすぐ立って」いたようだが、徐々に倒れてきて、今は斜めに傾いているのを見て、「石も歳をとると年々衰えるんだ」等とジョークのタネにもなっているのはいかにも面白い。『萬葉集新選』が世に出た75年前は、さぞかし、まだ元気(?)だったのだろう。

そこで、また口絵の写真に戻って、改めて、大和三山の左の山、「畝傍山」を見る。と、作家阿川弘之氏の光風先生の思い出話が思い起こされる。

＜昔から『畝傍のみほと』と言って、畝傍山はかたちが女陰に似てゐて」と、大和三山の歌の解説で露骨な(?)話をされることもあったが、わざと生徒を笑はせたり喜ばせたりといふやうな気配は微塵も無く、ちゃんとした学問的な講義でありながら、それが面白かった＞（「私の中の日本人」）

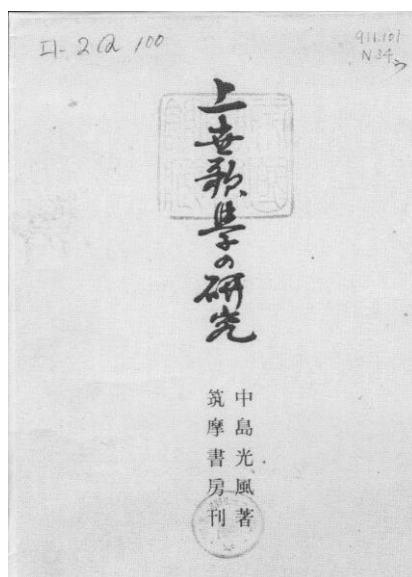
もしかしたら、旧制広島高校で、光風先生は、この『萬葉集新選』を教科書として使って、ふぐり山から見た大和三山の講話の中で畝傍山の「みほと」説を披露したのかも。それを、若き阿川氏や大浜氏が聴いて面白がったのではあるまいか。

案内板の最後に、「子孫繁栄や農耕信仰に関係した遺物と考えることもできよう」とあるように、光風先生の話は、阿川氏も言う通り、古代信仰にまつわるきわめて学問的な(?)講義だったのだろう。なお、ふぐりというと、イヌノフグリ、或いは、オオイヌノフグリの花名が思い起こされるが、この花は、その名に似ず、なんとも可愛い青い小さな花だ。在来種の花は、万葉集にも読まれているようだが、どの歌かは定かでない。

昭和20(1945)年1月、光風先生は、もう1冊、本を刊行している。『上世歌學の研究』（筑摩書房刊、全406頁）である。奈良時代から平安時代の末頃までの和歌を対象にする学問、いわゆる、「歌学」について、それまでに書き溜めた論稿に相当の改訂を加えてまとめたものである。

その「はしがき」で、次のように書いている。

＜元來私は高等學校在籍のころからすこしづつ萬葉集に興味を持つやうになり。大學の卒業論文も萬葉集に関するものであったし、その後も大體萬葉集を中心に勉強をつづけて來てゐるのであるが、右の卒業論文を書くために歌學方面のことをしらべる必要ができて關係諸文獻をあこれとのぞき見するうち、この方面にも興味を感ずるやうになり、（略）本書の内容が、歌學の研究とはいっても、相當偏したものになつてゐるのは、私の性分に由來する點も大いにあると思ふが、又一面右にいたやうな事情にもよるものである。しかしそれだけ又私自身にとっては、みなそのときどきに眞劍な興味を以て取組むこと



(国会図書館デジタルコレクション)

のできた問題であって、私としてはみなそれぞれに全身をうち込んで書いたものである> (p 1～2)

言うまでもなく、昭和 16(1941)年から始まった太平洋戦争の戦局は厳しいものとなり、昭和 18(1943)年からは、兵力不足を補うため、文科系の学生を在学途中で徴兵し、出征させる学徒出陣が始まる。

<この間時局は加速度的に緊迫の度を加へ來たり、殊に昨年 12 月には学徒出陣のことがあって、教へ子たちの多数が大挙大君の御楯として召されていったのは感激のきはみであった。入隊に先だち、もとの主任學級の連中が 20 数名、私のせまい家に集まり、くさぐさの山のさち海のさちを持ち寄って一夕壮行の宴をもよほしたのは、中でも印象の深い思ひ出である。

「兵にゆく 心はすでに さだまりて つどふこよひの うたげたのしも」

といふやうな歌も詠んだことであつた。前線に出動し、又すでに壮烈な戦死をとげた教へ子たちも何人かを數へる。一方學園内外も日を追うて緊張し來たり、すでに学徒の常時勤勞體制も下命せられるにいたり、私自身いつ筆を折って直接戦力増強に動員せられるやうになるかわからぬといふ現状である。もちろん自分でも及ばずながらその覺悟は十分にできてあるつもりであるが、ともあれこのやうな雰囲気の中にあつて、勤めの餘暇をぬすんではこのやうな仕事をつづけて來ることのできた幸福を思ふとともに、それだけ又なにか悲壯な感じもするのである。とにかくやれるあひだにやれるだけの仕事をしておいたら後に悔いは残らないであらう、さういふ気持で仕事をつづけて來た。その間出ていった教へ子たちからはかはるがはる通信があり。慰問すべき立場にあるものが反對に激励鞭撻されるといった工合であつた。仕事をしてゐる私の眼の前にとすればちらつくのは、これら出陣学徒の張り切つた顔であつた> (P3～4)

本文は、平安時代の歌學を中心に論じているが、最後の 3 章は、「歌の分類、編纂に関して（平安時代の）歌學にも幾分の関係がある」として、万葉集に関する論考をまとめている。「寄物陳思歌論」、「譬喩歌論」、「問答歌論」の 3 章であるが、紙数の関係で触れることは出来ない。国立国会図書館デジタルコレクションにアクセスするとフリーで見ることができるので、関心のある方は、そちらでご覧いただきたい。

そして、「はしがき」の最後に、「こんな歌も詠んだりした」と、自ら詠んだ歌 2 首を上げて、「かの仙覺が萬葉集註釋を書いていたのもおなじやうな情勢のもとにおいてではなかつたかと、ふと思ひ、このやうなことも後日のために書さめておいた方がよいと思ひここに記す次第である」として、歌人光風は、次の歌を書く。

「元寇の さ中にありて 仙覺は 萬葉集の 註釋書きつ」

いかにも万葉學者らしいこのユニークな歌を読み、この時期によくぞ本を出したものだ、いや、こんな時期でも万葉や歌學の本を出すことができたのだ、ということに感動を覚えた。学徒出陣だけでなく、昭和 19 年から始まった米軍の B29 による空襲は、20 年になるとその激しさを増し、3 月には東京や大阪等の大都市は壊滅的な被害を蒙り、その後全国の地方都市に拡大する中、なぜか自分の街だけは空襲がないことに、広島市民は気付き始める。その事情については次回に報告するが、いずれにしても、そのような中、光風先生は原稿に改訂や注釈の筆を入れ編集に没頭する。なお、筑摩書房の担当編集者の 1 人は、名編集

者として名をあげ、その後評論家、作家として活躍した臼井吉見氏だった。それまでに書いた原稿を本にまとめたら、と勧めてくれたのも、吉見氏らだったという。

そして、「はしがき」の最後に書かれた、もう1つの歌。

「出で征きし 教へ子どもの 誰彼れが 心に乗りて 朝な夕なに」

光風先生は、まさに時代の流れの中で、「大君の御楯として召されていったのは感激のきはみであった」と出征して行った教え子たち一人ひとりと心がつながり、その顔が朝な夕な、そんな心に浮かんできたのだろう。

広島市の中央公園の一面に、この歌の歌碑が立っている。この歌が載る『上世歌學の研究』が刊行されてから半年後の8月6日、人類史上初の原爆が投下されて広島は街は壊滅する。爆心地から1キロ余りの上流川町の自宅で被爆した光風先生は無事だったが、奥さんが配給物のことか何かで外出したまま行方不明になった。先生は炎天下、原爆の火で燃える町を、夫人を求めて彷徨い歩き、1か月後の8月31日、郊外の病院で放射能症のために亡くなられた。この歌碑は、単に歌を刻んだ歌碑ではなく、光風先生の墓碑銘であり、先生が残した『上世歌學の研究』の記念碑と言っても過言ではない。

これまで、光風先生の2冊の本を読んできた。1冊は昭和9年、もう1冊が昭和20年に刊行されている。と、そのちょうど中間にあたる昭和15年に刊行された1冊の万葉本が思い起こされる。森岡美子著『萬葉集物語』で、その「はじめに」にも書かれていたように、万葉集が、忠君愛国や軍国教育の一環として使われていた本だった。とりわけ、防人の「醜の御楯」の歌や軍歌となった「海ゆかば」の歌2首が、その代表だった。当然のことながら、この2首は、『萬葉集新選』の500首にも取り上げられているが、その「解題」や頭注等でも忠君愛国に触れることなく、また、1冊は陸軍大学教授が共著でありながら、2冊の本全体を通して、軍国教育の色合いはその気配さえ一切なかった。確かに、「大君の御楯として召されていったのは感激のきはみであった」と、教え子たちが出征して行っただけを書いているが、万葉集を愛した一人の万葉学者が、時代の流れとは関係なく、あるがままの万葉集について書き、論じて、いかにもいさぎよい。いや、むしろ、万葉本を書くことで、時代と戦っていたのかもしれない。

そして、まさに戦火の渦中にあった昭和20年2月、『上世歌學の研究』は刊行されたが、出来上がったこの本を手にして、光風先生が詠んだ歌が残されている。教え子たちは戦地で戦い、光風先生は本という厳しい戦場で戦っていた証とも言える歌である。

「戦ひの きびしき中 世にいでし この書見れば うれしくて泣かゆ」

しかし、うれしくて泣いた期間は、わずか半年で終わり、戦死した教え子たちを追うように、光風先生の「萬葉集物語」の幕は下りる。そして、その志を大浜氏などが引き継ぎ、それから数十年後に、このようにして光風先生の、戦場の万葉集物語をたどることになるのである。

